

## 第二章 光る源氏の物語 明石の姫君の入内

[第一段 紫の上、賀茂の御阿礼に参詣]

\*かくて(そうこうして)、\*六条院の御いそぎは(六条院が明石姫の御入内準備で忙しい頃の)、二十余日のほど\*なりけり(四月二十日過ぎのことでしたが、)。\*対の上(姫の母代わりである東の対の紫の上が)、\*御阿礼に詣うでたまふとて(葵祭の宵宮に参詣なさるといので)、\*例の御方々いざなひきこえたまへど(殿は然るべき他の御部屋様方にお誘いのお声掛けを為さったが)、なかなか(寧ろ御方々は)、さしも引き続き心やましきを思して(そのように大掛かりに車を引き連ねる行列で人目に着くのを気障りとお思いになって)、誰も誰もとまりたまひて(どなたも辞退なさって)、こととしきほどにもあらず(仰々しくも無い行列で)、御車二十ばかりして(牛車の二十台ほどを連ねて)、御前なども(先払いなども)、くだくだしき人数多くもあらず(だらだらと人数を多くせず)、ことそぎたるしも(簡素にしたのも)、けはひことなり(すっきりとした風情が格別の様相でした)。 \*「かくて」には<そう言えば>という話題転換の語法はあるのだろう。しかし、「まことや」のような上の話題に喚起されたとしても直接の繋がりが無い話題の場合ではなく、同時進行している別のことに話を変える時に使うようで<ところで、さて、一方では>の意味になるようだ。が、最も一般的な語用は、上の話を引き継ぐか、同じ舞台での時間経過を示す<こうして、そうこうして>だ。四月七日、八日に形が着いた源氏君と藤原姫の話題に続いて、四月二十日過ぎの明石姫の入内の話題になるのは、順当な話運びかと思う。 \*「六条院の御いそぎ」を<明石姫の御輿入れ日>とは読めない。入内は朝議であって、六条院の行事ではないので、「六条院の」の格助詞「の」は<～に於いての>という意味で「御いそぎ」に掛かる修辭ではなく、「六条院」が構文上で条件提示や補足説明となる従属節の主語である事を示す。また、「いそぎ」は<準備、支度>であり<その為に急ぐこと>であり、「御」は<御入内>を意味するので、「六条院の御いそぎ」は<六条院が御入内準備で忙しい時>となる。ということは「御いそぎは」も補足文なので、この係助詞「は」は結論を導く語用ではなく、参照値を示す格助詞「と」を含意する「～と(いうこと)は」という言い方で、本節が、此処では時候だが、その参照値と同程度であることを説明する<～程の、～頃の>という意味の語用だ。で、「六条院の御いそぎは」は全体が<六条院が御入内準備で忙しい頃の>という説明句に成っている。 \*「なりけり」はこの場合、「御いそぎ」が主語ではないので、その結語として「二十日余日ほど」<なのだった>という連語の語用ではない。連語の「なりけり」は<断定の助動詞「なり」の連用形に過去の助動詞「けり」の付いたもの>と古語辞典にあるが、此処の「なり」は「ほど」を受けていて、「ほどなり」で<くらいだった、頃のことだった>という言い方。「けり」は「来り(来ている、なっている)」の連用形で、中止法の接続語用なので、此処では場面説明の<～だったが>と言い換えて、下文に続ける。拗って、此処に句点は付けず、読点とする。 \*「対の上」は<紫の上>のことだろうが、姫の親代わりであって、その姫が入内するという時に「対の」という限定語用の属性を被せることに違和感を禁じ得ない。 \*「御阿礼」は「みあれ」と読みがあり、「みあれ」は大辞泉に「御生れ」とも表記され<神または貴人の誕生・来臨をいう語。ご生誕。ご来臨。>とあり、また<「賀茂の御生」のこと>ともある。「賀茂の御生(かものみあれ)」は<京都の賀茂別雷(かもわけいかずち)神社で、賀茂の祭の3日前の夜に行われる祭典。現在は5月12日。阿礼と称する榊(さかき)に神移しの神事が行われる。みあれまつり。みあれ。>とある。大辞林には<京都の賀茂神社の祭りの初日の祭礼。毎年4月の中の午(うま)の日に行われた。現在は五月十二日。みあれ。>とある。「三日前の夜」は<二日前の朝>なので、紫の上は葵祭の前前夜祭に出掛けたのか、と思ったが、下文に「祭の日の暁に詣うでたまひて」とあるので、「御阿礼」は賀茂社が神を迎え入れて祭中となつてからの<夜間参拝>のことを言っている、と解す。 \*「れいの」は<例によって、いつものように>で「い

ざなひ」に掛かる副詞ではなく、「御方々」を修辞する<定席の決まった←それなりの身分の→然るべき>という言い方、かと思う。頻繁に「御方々」を外出に誘った、とは思えない。また、「いざなひきこえたまふ」たのは紫の上ではなく殿なのだろう。参詣は、物見遊山ではなく入内御礼だったにせよ、紫の上が言い出したような書き方に見えるが、夏の御方や冬の御方を紫の上が誘うのは僭越だ。

\*祭の日の暁に詣うでたまひて(太政大臣家御一行は葵祭当日のまだ暗いうちに下鴨神社に参詣なさって)、かへさには(帰りには)、\*物御覧ずべき御棧敷におはします(御所からの勅使と齋院からの齋王の神社参拝に向かう行列が御見物できる仮設の御座所にお着きになります)。御方々の女房(御部屋様方付きの女房が)、おのおの車引き続き(それぞれ牛車を引き連らねて)、御前(棧敷の前に)、所占めたるほど(並び揃えた景観は)、いかめしう(荘厳で)、「かれはそれ(あれが六条殿御一行だ)」と、遠目よりおどろおどろしき御勢ひなり(遠目にも盛大な御押し出しでした)。\*「まつり」は注に<賀茂祭、通称葵祭。四月中の酉の日に行列が繰り出される。「暁」は夜深い刻限。>とある。\*「もの」とは<祭行事、式次第>かと思うが、現在の葵祭が観光を主眼に置いて平安絵巻の再現を目論むのとは違って、当時の式は「貞観年中(859~876)には勅祭賀茂祭の儀式次第が定められ、壮麗なる祭儀の完成を見ました。然しながら当時賀茂祭の社頭における祭儀は一般の拝観を殆ど許されず、祭の当日は唯御所から社への行装を一目拝観せんとして法皇・上皇達は牛車を押し並べ、或は桧皮葺の棧敷を設け、京の人々は言うに及ばず地方から上京してきた人達も加わり街は人で溢れたといわれています。」と「上賀茂神社」Webサイトの「賀茂祭」ページに説明があり、その「御所から社への行装」とは齋王の説明文に「往時賀茂祭当日齋王は御所車にて院を出御され、勅使以下諸役の行列と一条大路にて合流、東行し先ず下社へ次いで上社へ参向、上社にては本殿右座に着座され祭儀が執り行われました。その夜は上社御阿礼所(みあれしよ)前の神館(こうだて)に宿泊され翌日野宮へ戻られました。」とあることから、専ら御所を出た「勅使以下諸役の行列」の見物であり、特に「一条大路にて合流、東行し先ず下社へ」向かうまでの間が賑わったように推し量られる。

大臣は(源氏殿は)、中宮の御母御息所の(中宮の御母御息所が)、\*車押し避けられたまへりし折のこと思し出でて(十七年前の車争いで大臣家の葵の上一行に力づくで押し退けさせられなされた屈辱事件を思い出しなさって)、\*「押し避く(おしさく)」は<押し離す、障害物を押し戻す、どける>という言い方で、結果として車が壊れたとしても「車押し避けられ」は<車が壊され>という文ではない。この事件は、十七年前の葵祭で御視見物に出かけた六条御息所が葵の上一行と鉢合わせして、葵の上一行が御息所一行を其れと承知の上で場所取りの為に押し退けて、その際に牛車の先棒具類が折れた、というもので、車が壊れたことよりも王家権威筋の未亡人が臣下筋の実権家に蔑ろにされたという、当時の世相の本質的な問題を作者が提示したものだ。ところで、以前に葵巻を読んだ時も、御視の日と祭当日の日程が分からず、元々私は葵祭のことも齋院のことも知らないし、文意が理解できないまま、とにかく葵祭に先立って御視があったという順序だけを踏まえて言い換えた記憶がある。改めて、葵巻第一章の車争いの話を読み直してみると、相変わらず分かり難いものの、話の運びとして「御視の日」に車争いが起こり、その日の描写が終わったと目される次の行に<「祭の日は大殿にはもの見たまはず」(葵巻第一章第二段)>と大臣家が<翌日の祭の日は見物に出掛けなかった>と読めるような書き方がしてある。そして、その日は<「大将の君、かの御車の所争ひを、まねび聞こゆる人ありければ、「いといとほしう憂し」と思して」(同)><参うでたまへりけれど(源氏は謝罪をしようと六条の御息所の許に出向かれたが、御息所は)、齋宮のまだ本の宮におはしませば(齋宮がまだ当所にいらして)、榊の憚り(さかきのはばかり、神事への差障りが有る事)にことつけて(を口実にして)、心やすくも(気を許すような)対面したまはず(面会には応じなさらぬ)。(同、拙訳)>とある。そして、次の文では<「今日は(其の日は源氏は左大臣家に足が向かず)、二条院に離れおはして(二条の院に戻って左大臣家から距離を置いて居らして)、祭見に出でたまふ(連日の賀茂祭の見物にお出掛けする事に

為された)」(葵卷第一章第三段冒頭、拙訳)とあり、拙訳にも「連日の」としてしまっているように、私は「御禊の日」の次の次の日に「源氏殿が紫君を連れて祭り見物に出かけた」かのように読んでいる。しかし、その祭見物の描写のまとめに「人と相ひ乗りて(女を同伴しているのを)、簾をだに上げたまはぬを(源氏が簾さえ巻き上げ為されないのを)、心やましう思ふ人多かり(残念に思う女たちは沢山いました)。「一日の(ひとひの、先日の)御ありさまのうるはしかりしに(御禊の日の勅使を勤めた源氏の晴姿に引き換え)、今日うち乱れて歩きたまふかし(今日は随分寛いだ姿でお出掛けなさっているようだ)。誰ならむ(誰だろう)。乗り並ぶ人(一緒に乗っている人は)、けしうはあらじはや(其れ相応の人なのだろう)」と、推し量りきこゆ(推し量る声が上がっていました)。(同、同)とあって、「一日(ひとひ)」は「昨日」ではなさそうだが、「御禊の日」が何時の事なのかははっきりしない。第一、御禊で勅使を務めた大将が祭日の齋院供奉はしないのか、という疑問は以前にもあって、これは「御禊の日」の描写にくとりわきたる宣旨にて、大将の君も仕うまつりたまふ。>というその日だけの特例で、大将ほどの重役は通常は帝以外の者に供奉しないが、「光る」存在の源氏殿が腹違いとは言え妹宮である齋院に花を添えた、という位置付けだろうと納得したものの、それにしても、御禊と祭日が連日だったにしては、兄帝への報告とか何か御禊の余熱感を引き摺りつつの連続描写になりそうなものだが、「祭の日は大殿にはもの見たまはず」(葵卷第一章第二段)にはそういう熱っぽさが無く、とても読みづらかったと記憶している。現行の葵祭の日程は、五月三日に流鏑馬(下鴨神社)、四日に齋王代の御禊儀(両社毎年交互)、五日に武射、そして十二日に御阿礼、十五日が行列、となっているようだが、是には準えられない古事だろうと思っていたら、例の「上賀茂神社」サイトの「賀茂祭」ページに「往時賀茂祭の当日に先立つ午又は未の日に紫野の院より賀茂川の河原に赴かれて行われた「御禊(ぎょけい)」と記されてあって、とすると、葵祭は「祭日も古来4月吉日(第2の酉の日)」(同ページ)とあるので、「御禊の日」はその二、三日前ということで話は落ち着きそうだ。何を頼って読めば良いのかは難しい所だが、学会や権威筋にはより分かりやすい注釈を望みたい。お願いしますよ、本当に。

「\*時により心おごりして(場当たり的に偉ぶって)、さやうなることなむ(あはしたことになるのは)、情けなきことなりける(嘆かわしいことだった)。こよなく\*思ひ消ちたりし人も(この上ない侮蔑を犯してしまった人も)、嘆き負ふやうにて亡くなり(恨みを買うようにして亡くなってしまった)」 \*時により」は渋谷・与謝野両訳文共に「権勢をたのんで」としてある。原文の字句通りか、単語自体とか、成句とも言うべきものに付いて訳文が一致するのは、同じ日本語の変化を理解するに当たっては共通の概念を持つことが求められるので、別筋を通っての同様の帰結の場合もあるだろうし、其れが一つの正解を示している場合も少なくないだろう。が、「時により」は「権勢を頼んで」という成句では無いし、是を「権勢をたのんで」とする解釈は各語の幅の在る語意の可能性の中から、共通の前提認識ないし予断を持って導かれた同一の結論であり、別筋ではない。少し詰めれば、「時」という名詞は「時勢」の場合もあるだろうが、ある一定の「時間、期間、場面、場合、時代、時節、機会」などと多くの意味を持ちうる。ただ、「により」の「より」は動詞「抛る(根拠とする、依拠する、依存する、起因する)」の連体中止で、「に」はその作用主体を示す格助詞なので、「～により」が「～に抛って、～の所為で、～のお陰で」くらいには成りそうだから、「時」は何らかの「力」を示して居るようには見える。それでも、「時により」を現代語の「時によりけり(場合次第)」の意味で「不意に」や「時たま」や「その場の勢いで」みたいにすることは十分出来そうだし、その「ときたま」を話者の意図を汲むかの予断を持って「間が悪く」と言い換えても直ちに成立しないとも思えない。確かに、「心おごりし」たのは大殿側だし、大臣家の従者が権勢を頼んで御息所の牛車を追い遣ったのだろう。また、葵の上は気位の高い面白味の無い女として描かれていたし、光君がそう思っていたのなら仕方の無いことではあるだろうが、変人ではなく才色兼備ではあったかと思うし、宰相君の実母だ。それが、歌の一篇も残していないのは作者の性格隠しも徹底したものだ。だから、作者に「時により」を「権勢を頼んで」とする意図があった可能性はあるが、私にはそう言い換えることに、是を「間が悪く」とする場合

と同程度の訝しきがある。\*「思ひ消つ」自体の語感は<無視する、忘れる>だろうが、しっかり対応すべき相手を無視するということは<この上ない無礼>であり<軽視=蔑視>だ。

と、そのほどは\*のたまひ消ちて(そのあたりは言葉を濁しなさって)、\*「言ひ消つ」は<否定する、非難する>もあるが、此処では<話を終りまで言わない、言い差す、言ひすばむ>で<はっきり言わない→言葉を濁す>。

「残り\*とまれる人の(遺児である)、中将は(息子の中将は)、かくただ人にて(このような臣下身分にあって)、わづかになりのぼる\*めり(このところ少し出世したに過ぎない)。\*「とまる」は<動きを止める>であり<進行を止める>であり、結果として<状態が保持される→残る>を意味する語でもある。となると、「残る」の方を<止まっている>ではなく<名残りとなっている=遺こる>と取るべきなのだろう。また、「とまれる」の「る」は完了・状態を示す助動詞「り」の連体形で「人」を修辞している。「り」に繋げる「止まる」の語尾変化は已然形と説明されるが、「とまれる」という語が然程抵抗無く<止まっている、止めている>と受け取れる語感なのに比べて、この文法説明が妙に分かり難い。気に成るので少し考える。と、以前から「已然形」と「未然形」という言い方に今ひとつ分かり難さを感じていたことを思い出す。「已然形」はざっと<以前から然様を示す>語尾変化で、「未然形」は<未だ然様ならずを示す>語尾変化、といった印象で、それで大体コトは収まっているようにも思うが、古文ではどちらも条件構文を成す接続助詞「ば」を導き、この「り」に付いてはサ行変格活用動詞の「す(為)」は未然形を取る、という始末の悪さだ。尤も、「す」の未然形「せ」は命令形の語幹母音変化で、上代では已然形と命令形が混用されたという解釈で、「り」に繋がるのは已然形の統一活用と説明されてはいるようだが、平易ではない。ところで、どちらも条件構文を成す、ということはその動詞の応力作用を客体視して考えるという思考方法を示す語法、ではありそう。であるなら、「已然形」が<作用の結果状態の想定>を示して論理を誘導する<指示形>で、「未然形」が<作用の動向推移の想定>を示して論理を規定する<排他形>だ、とか言ってみても、部分説明っぽいし、相変わらず分かり難い。ただ、文法の統一理論は論理学の勝利を意味するように思えるので、専門家諸氏の健闘を期待したい。\*「めり」は単に事態認識を示す「なり」とは違って、現に目にすること、または目に付くことに対する一定の判断を示す言い方、かと思う。で、その「判断」の程度は「わづかに」なので、「わづかに~めり」は<このところ少し~のようだ>という言い方。で、「なり」のぼるは「成り上がる」で<出世する>だが、その早さに目覚しさと品の無さを示す語感古語にも在るようで、「わづかになりのぼる」は事態の好転を認識しつつも、全体の評価は低い訳なので、此処の「~のようだ」は<~に過ぎない>という判定文だ。

宮は並びなき筋にておはするも(中宮は天子というこの上ない身分ではいらっしやるが)、思へば(思えば早くに二親に死に別れて)、いとこそあはれなれ(実に御勞しい)。

すべていと定めなき世なればこそ(このように、全てが明日をも知れぬ世なればこそ)、何ごとも思ふさまにて(何につけても思い通りに)、生ける限りの世を過ぐさまほしけれと(贅を尽くして生きていたいものだが)、残りたまはむ末の世などの(後にお居残り為さるあなたの晩年などの)、\*たとしへなき衰へなどをさへ思ひ(落差の大きい儉しい暮らし向きなどまで考えると)、憚らるれば(何かと節制させられますので) \*「たとしへなし」は<比較にならないほどの>という形容詞。この語から「生ける限りの世」の値を逆算すると<X=-「衰へ」>なので<X=「贅沢」>となる。源氏殿は藤壺入道宮の侘び住まいなどを思ったのだろうか。冗談半分だが、半分だ。

と(と紫の上に)、うち語らひたまひて(軽口を叩きなさって)、上達部なども御棧敷に参り集ひたまへれば(閣僚たちも御棧敷に参上し集まりなさっていたので)、そなたに出でたまひぬ(そちらの部屋に出てお行きになりました)。

## [第二段 柏木や夕霧たちの雄姿]

\*近衛司の使は(このゑづかさのつかひは、近衛府の賀茂社参拝の勅使は)、頭中将なりけり(頭中将でした)。かの大殿にて(その自宅である内大臣家が)、出で立つ所よりぞ(供奉行列の出発場所ということで)人びとは参りたまうける(参列者たちが参上していらっしゃいました)。\*「近衛司の使」は注に<近衛府から出ている賀茂祭の勅使、柏木。他に、内蔵寮、馬寮、内侍所からもそれぞれ賀茂祭の勅使が出ている。>とある。

\*藤典侍も使なりけり(とうないしのすけもつかひなりけり、藤原惟光の娘で六年前に五節舞姫を務めて、その際に二条院で学生君をしていた源氏若君に見初められ、恋仲になったまま典侍として宮仕えをしていた女も内侍所の勅使なのでした)。\*「藤典侍」は注に<惟光の娘。夕霧の愛人。「少女」巻(第六章一段)に五節舞姫として登場。>とある。また、惟光は梅枝巻第一章第三段に「惟光の宰相」とあり、それは今年の春二月の薫物合わせの場面で、殿が調合した練り香を「西の渡殿の下より出づる汀近う埋ませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛尉、堀りて参れり」という行だった。従って、補語する。

\*おぼえことにて(世間の関心が高いことなので)、内裏(うち、帝や)、春宮(とうぐう、皇太子)よりはじめてまつりて(を初めと頂き申して)、六条院などよりも(太政大臣などからも)、御訪らひども所狭きまで(お祝いの品々が所狭しと)、御心寄せいとめでたし(御心寄せられて内大臣家の玄関先は大変華やかです)。\*衆人が心浮き立つこと、の多くは権威付けされた寄らば大樹の衆愚かも知れないが、それだけに、それを盛り上げて群集を制御するのは正に政治だ。群集は時代を動かす。人間社会の構造を形成するのは、ヒトは有機生命体なので本質的には、経済合理性だ。その経済合理性の追求は貨幣権威秩序の採用で規格統一を図ることによって促進されるので、権威集団は同一秩序の範囲拡大を望む傾向にあり、これが帝国主義の一つの説明方法だ。また是はブロック経済の説明方法でもある。しかし権威とは価値基準であり、物質の偏在性を金融の均一性に折り合わせる政治に於いて、その説得力こそが権威に期待される。が、多くの場合、話し合いで統一できない価値基準の周知徹底は、その相違点を限度に別集団として互いに尊敬し合い、競技試合などの代替行為で激高を抑えつつ継続交渉する、という気長な姿勢ではなく、実際の殺戮と破壊に拠る戦争の勝敗で物質自体を一時寡占とその後の配分によって強制移動する、という気短な実力行使で解決されてきた。即ち、権威は歴史的にまた経験的に排他性が強く、人間社会に於いては今に至るまで武力によって担保され続けて来ている。ところで、一市民は当然の事、天皇や大統領や軍人や警官であっても、一個人は、ヒトの個体属性として権力を持っているわけではない。尤も、権力を象徴する権威は誰かが体現するし、権力という行政組織力は確かにその組織長の指示で執行されるが、組織は制度設計されたものであり、組織力の根源は集団の共通認識なので、一個人の特異な思いが集団の動向を左右するのではなく、集団の共通認識を自分の意志と同一化できた特異な個人が指導者に祭り上げられる、という作用はある。そして、それをその個人も自覚するので、共通認識を持つ権威集団の中に居る一個人は権力者を実感してしまうことになる。これが、普通は、エリート意識だ。が、集団の共通認識を形成するのは物質環境であり、それは静止していない。日常の身の回りの逐一の変化も然り乍ら、地震や台風も起こる。地球は変化し続けるし、宇宙は果てしない。にも関わらず、共通認識は概念の共有が必要なので一定範囲での静止状況を前提にせざるを得ない。となると、最も強烈な権威意識は、時の勢いで変化を成し遂げて、あたかも一定の静止

状態を実現してしまったように見做せる、群衆の中にこそ根を張りそうだ。群集の高揚感はそれを内在する。そして、個人とは別次元の集団という大きな力で社会を動かす。ヒトが豊かに生きるということは、再生産が期待できる状況下で、不安無く蓄財を消費して命を維持し、再び蓄財の為に元気に動き続けられることだ。群集にヤル気を引き出させる夢を描ける者は、紛れも無く大政治家だ。ただ、変化が起きそうな期待感は、どんなに強烈でも一時的なものに過ぎないのだろう。成し遂げたものの狂信が人類の福音である事を望むばかりだ。

宰相中将(源氏の宰相中将は藤典侍に)、出で立ちの所にさへ訪らひたまへり(出発間際にお手紙を届けなさいます)。\*うちとけずあはれを交はしたまふ御仲なれば(源氏君は婚意の確認もしないで情交なされた御相手だったので)、かくやむごとなき方に定まりたまひぬるを(奥様がこうして身分ある内大臣家の姫君に決まりなされたのを)、ただならずうち思ひけり(典侍は心穏やかならず思ったのです)。\*「打ち解く」は<警戒心がなくなり、隔てなく親しむ。気を許す。>と大辞泉にある。その打消しは<警戒する、気を許さない>だが、「あはれを交はしたまふ御仲(体を重ねなされた御相手)」なのだから好意は持ち合っているので、此处で言う「警戒」は<源氏君が自分を妻に迎える気があるかどうかの疑い>で<本気の確認をしていない状態>を言う、のだろう。少女巻第六章第四段に、若君から娘への手紙を見付けた惟光が「この君達の(この若君が)、すこし人数に思しぬべからましかば(娘を少しは一人前にお考えになって下さるなら)、宮仕へよりは(御所へ女官勤めに出すよりは)、たてまつりてまし(若君に差し上げたいものだ。)」と言っていた事からして、主人筋に対しては<真意の確認>などは迫れたものではなかったのかも知れない。そして、正式な申し込みの無いまま愛人関係が続いていた、のだろう。世慣れた女なら、一か八か源氏君に揺さぶりを掛けることもしたかも知れないが、従順に待つだけの可愛い女だったようだ。如何にも惟光の娘。

「何とかや今日のかざしよ、かつ見つつおぼめくまでもなりにけるかな (和歌 33-09)

「その葉っぱ何て言ったつけ、逢ふ日と関係あつたつけ (意識 33-09)

\*「今日のかざし」とは、葵祭当日なので参列者が髪に挿すのは葵の葉と決まっていて、「葵(あふひ)」を「逢ふ日」に掛けるのは葵祭の日の歌詠みの約束言、ということらしい。が、私にはその素養がないので、この歌の意味が直には分からなかった。「かざし」が「髪挿し」で葵祭なら、それは「葵」で「逢ふ日」かと、分かってみれば筋も洒落っ気も見える歌だが、注があっても邪魔には成らないだろうに。「おぼめく」は<はっきりわからない、はっきりわからないふりをする>とある。「おぼろか(おぼろなさま、はっきりみえない)」の同語幹だろう。

あさまし(会えば分かるか)」

とあるを(とある宰相君の贈歌を)、\*折過ぐしたまはぬばかりを(この祭日の折に引っ掛けて御詠みになっただけのものなので)、いかが思ひけむ(典侍はどう思ったものか)、いとも騒がしく(気忙しく)、車に乗るほどなれど(牛車に乗り込む所だったが)、\*「折過ぐしたまはぬ(折りを心得なされた)」は源氏君の気取った歌詠みに対する語り手のからかいでもあるだろうが、下の典侍の返歌の「桂を折りし人」に引っ掛けた言い回しでもある。その「桂を折りし人」の言い回しは「博士ならでは」のオチに繋がるようなので、この歌の贈答場面の饒舌は、それと意識した上での冗舌だ。

「かざしてもかつたどらるる草の名は、桂を折りし人や知るらむ (和歌 33-10)

「あなたが分からないのなら、バカな私は分からない (意識 33-10)

\*「たどる」は<手取る→不案内な道を手掛かりを探しながら迷い進む→まごつく>。「桂を折る(かつらををる)」は大辞林に<晋の郤詵(げきしん)が科挙において、自分の対策を「桂林の一枝(けいりんのいっし)、崑山の片玉(こんざんのへんぎょく)」に比して自賛した故事より>と補説があり<官吏の登用試験に合格する>こととある。「桂林の一枝、崑山の片玉」は<「晋書(郤詵伝)」の、晋の郤詵が賢良の試験で第一等となり、雍州の官吏に任ぜられた時、武帝の問いに、桂林の一枝、崑崙山の玉の一片を得たにすぎないと言った故事から、わずかばかりの出世。また、科挙に合格することのたとえ。>とある。また、「折桂(せっけい)」という語もあり、これは大辞泉に<《「桂を折る」「桂林の一枝」などの故事から》昔、中国で、科挙に合格すること。唐以降は、進士の試験に首席で合格すること。>および<日本の律令制で、官吏登用試験の策試に合格すること。>とある。で、この歌筋は「かざしても(自分でこの葉を髪挿していても)かつたどらるる(「且つ見つつ」どころか、且つ思い出せない)草の名は(この草の名は)桂を折りし(国家試験に受かったほどの)人や知るらむ(あなたこそ知っている筈でしょうに)」となるようだ。かつ、かつ、かつら、は三段オチか。いや、下に四段目の<桂=博士>のオチがある。

\*博士ならでは(あなたは、お勉強家さんなんだから) \*このオチは、六年前に学生君だった源氏君が五節舞姫だった典侍に、「天にます豊岡姫の宮人もわが心ざすしめを忘るな(和歌 21-07)」と子供っぽい唐突さで、しかし教養の高さを覗かせて声を掛けたことに始まり、五節の後にも女の弟の童殿上を遣って「日影にも しるかりけめや 少女子が 天の羽袖に かけし心は (和歌 21-10)」と率直な贈歌で言い寄って、付き合いだした御仲ものらしげな、少女巻六段の記述を下敷きになっている。

と聞こえたり(と申し上げました)。はかなけれど(ちょっとした言葉遊びだが)、ねたきいらへと思す(気の利いた返歌だと宰相君は御思い為さいます)。なほ(この先もまた)、この内侍にぞ(源氏君はこの女官という者に)、思ひ離れず(思いが続いて)、はひまぎれたまふべき(夜這い紛れなさるのでしょう)。

[第三段 四月二十日過ぎ、明石姫君、東宮に入内]

かくて御参りは(さて、その明石姫の東宮入内に際しては、13歳の東宮には母女御が付き添っていらして、姫も11歳と幼いので)北の方添ひたまふべきを(その母親としての宮腹筋である源氏殿の正妻が付き添いなさるべきなのだが)、「常に長々しう(紫の上が常にいつも御所に伺候して)\*え添ひさぶらひたまはじ(姫に付き添い申しなさるまでもないだろう)。かかるついでに(この折に)、かの御後見をや添へまし(実の母親を姫の御世話役に付き添わせよう)」と思す(と源氏殿はお思いになります)。 \*「え～たまはじ」は<～為さるには及ばないだろう、～なさるまでもないようだ>という言い方、かと思う。もし、本人が<とてもお出来にならないだろう、適いなさるまい、力が及びなさらないようだ>というのなら「え～たまふまじ」になる、とかは良く分からないが、明石姫に皇太子妃が務まって、紫の上にはその後見が務まらない筈もないだろう。むしろ、上にとっては源氏殿が幼い時から暮らした後宮の桐壺に詰めたり部屋住みすることは楽しみでもあり、東宮妃の母格の立場であれば晴舞台とも言える程だったかも知れず、だからこそ殿は其れを嫌ったという事情にさえ穿ち見えるし、殿はとにかく紫の上を目の届く所に据えて置きたいらしい。それに明石姫の東宮入内が適った時点で、一世源氏の準宮家筋にして太政大臣家の姫君であり、その宮腹筋の北の方である紫の上が正統な家筋の子として育てたという、非の打ち所の無い出自触れ込みは世間への押し出しとしての其の役目を既に果たしていて、先々のことは姫本人と東宮本人の相性に拠るのであり、後は実質での相談相手が居れば良い状態に成っている訳だ。源氏殿 39歳、紫の上 31歳、明石御方 33,4歳(推)だ。

上も(紫の上自身も)、「\*つひにあるべきことの(親しく同居していても不思議ではない実の母子の)、かく隔たりて過ぐしたまふを(このように別々に暮らしたまふのを)、かの人も(当の母御も)、ものしと思ひ嘆かるらむ(辛く思つて悲しんでいらつしやることでしょう)。 \*「つひにあるべきこと」に近い現代語の言い回しは<本来あるべき姿>かと思う。が、「本来あるべき姿」が<他に有る>とすると、この文は現状否定であり、殿に対する反論になってしまう。で、論理に煩い作者、および当時の有識者はこういう場合、この「つひに(遂に、最終的に、結局は)」を<本義はともかく収まり方として>という言い方で使つたようだ。実情からしても、厳然たる身分社会だったのである。しかし、「最後はそう在るべき事柄」と言つてしまうと<現状が違つて居ても構わない>という意味を内包してしまうので、文意を汲めば<そうで在つても当然のこと>ぐらいの曖昧な言い方が良さそうだ。「こと」は「隔たり」の反語だから<母子の親しい同居>だ。

この御心にも(姫君のお気持ちにも)、今はやうやうおぼつかなく(今では次第に自立するに当たつての相談相手として改めて実母を頼りたくなつて)、あはれに思し知るらむ(会いたいと思ひに違いない)。かたがた心おかれたてまつらむも(どちらもが私に心隔てなさるといふのも)、あいなし(望ましくない)」と思ひなりたまひて(とお思ひになりなさつて)、

「この折に添へたてまつりたまへ(この入内に際して母御を姫に付き添わせ申して下さい)。まだいと\*あえかなるほどもうしろめたきに(姫はまだとてもか弱いのが気掛かりなのに)、さぶらふ人とても(仕える女房たちも)、若々しきのみこそ多かれ(若い者ばかりが多く居るだけです)。 \*「あえか」は<弱弱しいさま>と古語辞典にある。

御乳母たちなども(頼りとすべき乳母たちなども)、見及ぶことの心いたる限りあるを(目配せに限りがありますし)、みづからは(わたしが多用で)、えつともしもさぶらはざらむほど(いつも付きっきりで居られないことから)、うしろやすかるべく(あの方が居れば安心です)」

と聞こえたまへば(と申しなさると)、「いとよく思し寄るかな(よく気が付いたものだ)」と思つて(と殿はお思ひになつて)、「さなむ(こういうことにする)」と、あなたにも語らひのたまひければ(明石御方にもお話しなされたので)、いみじくうれしく(御方はしみじみと嬉しく)、思ふこと叶ひはべる心地して(願ひが適つた気持ちになつて)、人の装束(御方に同行する部屋女房の御所入り衣装や)、何かのことも(道具類などの調達も)、やむごとなき御ありさまに劣るまじくいそぎたつ(後宮の他の高貴な方々の御様子に劣らないように取り揃えます)。

尼君なむ(姫の祖母である御方の母君の大堰の尼君が)、なほこの御生ひ先見たてまつらむの心深かりける(今尚この姫の行く末を見守り申したいとの気持ちを深く持つていました)。「今一度見たてまつる世もや(もう一度御会ひできる縁が在るだろうか)」と、命をさへ執念くなして念じけるを(生きる励みにして読経してはいたが)、「いかにしてかは(それは適わない)」と、思ふも悲し(思えば御方は悲しかったのです)。

\*その夜は(入内当日の夜は)、上添ひて参りたまふに(本家の姫の証しとして紫の上が介添え役で御所へ参内なさるので)、さて(そのように姫と上がお乗りになる)、\*車にも立ちくんだりうち歩みなど(輦車にも後ろから立ち従つて付き歩くなど)、人悪るかるべきを(実母たる明石御方には人目に情けない訳だが)、わがためは思ひ憚らず(自分の為にはどうでもよく)、ただ(偏に)、か



く磨きたてまつりたまふ玉の疵にて(源氏夫妻がこのように磨き上げ申しなさる玉のような姫の負い目として)、わがかくながらふるを(自分がこのように生き永らえて姿を現していることを)、かつはいみじう心苦しく思ふ(姫の為にはつくづく申し訳なく思います)。 \*「その夜は」とは、東宮への姫君入内が話題なのだから<その当日の夜は>ということなのだろうが、それにしては具体的な場面説明が無く、いやに分かり難い文だ。第一、入内が夜に行なわれることも私は知らないし、何の注釈も無いが、これで普通に読み進めることが出来た当時の読者とは、概要知識として御所行事を知っている程度の人たちではなくて、実際にその裏方に従事した女房や関係者たちに違いない、などと逆推するほどだ。 \*「くるま」とあるから御輿ではなく「輦車(れんしゃ、てぐるま、人が引いて運ぶ車)」のこと、なのだろう。ということは、此処の「さて」は11歳の姫君ひとりだけを乗せたものではなく、上が付き添いで同乗した、という意味のようだ。

\*御参りの儀式(入内に際しての記念品や姫の御部屋装飾の様式は)、「人の目おどろくばかりのことはせじ(人の目を驚かすような豪華なことはしないで置こう)」と\*思いつつめど(と源氏殿は諸侯に遠慮して自重なさったが)、おのづから世の常のさまにぞあらぬや(自然と普通の程度のもものでは在り得ません)。 \*「御参りの儀式」の「儀式」は式次第ではなく、正式なまたは公的な事柄である「儀」に伴う、それに相応しい飾付け方法としての作法・様式であり、実際には室礼や嫁入り道具の品々のこと、かと思う。なお、姫のお部屋に付いては梅枝巻第二章第二段に「この御方は(こちらの源氏姫の御部屋は)、昔の御宿直所(昔の殿の御宿直部屋の)、淑景舎を改めしつらひて(淑景舎を改装なさって)」とあり、道具類の調達にも殿が格別の心配りを為さった話が下に続いた。因みに同段には、明石姫に先立って「左大臣殿の三の君参りたまひぬ。麗景殿と聞こゆ。」ともあった。 \*「思ひ包む」は<気持ちを隠そうとする>だが、何も恥ずかしいからという訳でもなく、政治上の配慮としてなのだろうから<自重>としたい。梅枝巻第二章に二月二十余日に姫の裳着式が描かれ、それは東宮の元服に近い日取りであり、そのまま姫の東宮入内の事運びとする源氏殿の意向だったものを、諸侯が源氏殿に遠慮して各姫君の入内を見合わせる気配を見せたことを、逆に太政大臣として源氏殿が憂慮して明石姫の入内をこの四月末まで延期していた、という事情が説明された話だった。そして、そのことを背景にしたのが、此処の書き方なのだろう。つまりは、諸侯の入内意向とは諸勢力、特に藤原右家、の実態反映なので、太政大臣としてはその調整こそが政治そのものだったわけで、その諸勢力の意向の中に宰相君と中務宮家との縁談話も持ち上がっていて、それが却って宰相君と内大臣家姫との婚儀を纏めることになった、という話の流れだったかと思う。

限りもなくかしづきすゑたてまつりたまひて(この上なく大事にお育て致し東宮妃にお就かせ申し上げなさって)、上は(上は姫を)、「まことにあはれにうつくし(本当に心から愛しい)」と思ひきこえたまふにつけても(と思ひ申しなさるにつけても)、人に譲るまじう(親の役目を実母とは言え、他の人に譲りたくなく)、「まことにかかることもあらましかば(本当にこのような子があつたら良いのに)」と思す(と思ひなさいます)。大臣も(源氏殿も)、宰相の君も(宰相君も)、ただこのことひとつをなむ(ただこのことばかりを)、「飽かぬことかな(残念だ)」と、思しける(お思いでした)。

#### [第四段 紫の上、明石御方と対面する]

\*三日過ぎしてぞ(後宮の淑景舎で妃に付き添って三日過ぎしてから)、上はまかでさせたまふ(上は六条院に退出なさいます)。たち変はりて参りたまふ夜(入れ替わりに明石御方が妃の御世話役として参内なさる夜に)、御対面あり(お二人の初めてのご対面がありました)。 \*「みかすごして」は注に『集成』は「新婚三日間に、正式の婚礼の行事(後朝の文、三日の夜の餅など)がある。紫の上がそ

れを取り仕切っていたのである」と注す。>とある。「取り仕切っていた」というよりは、源氏殿が上に任せていた、ということなのだろう。ところで東宮は、淑景舎の南、麗景殿の東、になる昭陽舎は梨壺を居室としていたので、この三日間は淑景舎は桐壺にお渡りになった、ということだろうか。東宮と妃は何処でどのように過ごしたのか。その際に源氏殿は何処にいたのか。上に任せるにしても、それは場の仕切りであって、殿の不在は考え難く、例えば「三日の夜の餅」の主人役は殿でなければ務まらないのではないのか。であれば、「上はまかでさせたまふ」や「たち変はりて参りたまふ」の敬語の使い方が気になって、是に殿の使役も有り得るようにも思ったが、何しろ全てに於いて勝手の分からない御所内でのことなので、この語用もその内かと「妃」を表に立てる言い換えにした。文意は分かりやすいのに、場面背景が見えない所為か、言い回しが気になる妙な文だ。

「かく\*おとなびたまふけぢめになむ(こうして姫が東宮妃に納まりなされた節目の日ということで)、\*年月のほども知られば(此処に至る年月の長さも、その間のいろいろな思いも、報われたかと思われましますので)、疎々しき隔ては(今さら格式張った分け隔ては)、残るまじくや(要らないはずですが)」 \*「おとなぶ」は<おとならしくなる、おとなになる、成長する>と古語辞典にあるが、此処は「けぢめ(区切りとなる日)」として「三日目の夜」のことを規定してるのだから<正式に妃となった→身分が収まった→一人前に独立した>という内容を、こういう言い方にしたもの、と解すべきなのだろう。 \*「年月のほど」は注に<紫の上が明石の姫君を引き取って八年になる。>とある。で、「知る」は<分かる、了解する>という含みの多い語で、それが「知られば(自ずと分かる)」という言い方だから<お互いに分かり合える筈>みたいにも聞こえるし、「けぢめになむ」を受ければ<今こそ納得できる→報われた思い>とまで言えると思う。

と(と上は御方に)、なつかしうのたまひて(親しく仰って)、物語などしたまふ(姫の成長振りなどを語り聞かせなさいます)。これもうちとけぬる\*初めなめり(こうした姫の話題も二人が親しくなれた理由だったのでしょう)。ものなどうち言ひたるけはひなど(折々に感謝を示す御方の態度などから)、「むべこそは(姫の気立ての良さは母親譲りだ)」と(と上は御方を)、めざましう見たまふ(感心して御覧になります)。 \*「はじめ」は<根源、基本理由>と<取っ掛かり>の掛詞。

また(一方で御方は)、いと気高う盛りなる御けしきを(とても上品で艶やかな上の御姿を)、かたみにめでたしと見て(敵ながら天晴れと思ひ)、「そこらの御中にも(数知れぬ御相手の中でも)すぐれたる御心ざしにて(優れているとの殿のお見立てによって)、並びなきさまに定まりたまひけるも(並びなき正夫人の地位に納まっていらっしゃるのも)、いとことわり(至極当然だ)」と思ひ知らるるに(と思ひ知らされるにつけても)、「かうまで(このような秀でた人とまで)、立ち並びきこゆる契り(源氏殿の妻として同列に並び申せた自身の宿縁は)、おろかなりやは(捨てたものではない)」と思ふものから(と思うものの)、出でたまふ儀式の(上の退出のなかり様の)、いとことによそほしく(また殊に格式高く)、御輦車など(おんてぐるまなど)聴されたまひて(ゆるされたまひて)、女御の御ありさまに異ならぬを(女御の御処遇に変わらないのを)、思ひ比ぶるに(受領家格の自分と思ひ比べれば)、さすがなる身のほどなり(さすがに思ひ知らされる宮家格の身分違いなのでした)。

いとうつくしげに(とても可愛らしく)、雛のやうなる御ありさまを(お人形のような姫の御姿を)、夢の心地して見たてまつるにも(明石御方は夢心地で拝し申し上げるにも)、涙のみとどまらぬは(涙ばかりが止まらないのを)、\*一つものとぞ見えざりける(悲し涙に暮れてきた同じ自分

が流すとは思いませんでした)。 \*「ひとつもの」は注に「嬉しきも憂きも心は一つにて分れぬものは涙なりけり」(後撰集雑二、一一八八、読人しらず)を踏まえる。>とある。

年ごろよろづに嘆き沈み(長年何につけても姫と別れていることに嘆き気落ちして)、さまざま憂き身と思ひ屈しつる命も延べまほしう(様々な辛い立場を味わって縮こまっていた生き甲斐も背伸びして羽を伸ばして)、はればれしきにつけて(飛び立つほどの晴れ晴れしさを思うにつけても)、まことに住吉の神もおろかならず思ひ知る(まことに住吉神の靈驗あらたかを思い知らされます)。

思ふさまにかしづききこえて(理想通りに教育が施されて)、心およばぬことはた(気掛かりなことはもう)、をさをさなき人のらうらうじさなれば(少しも見当たらない姫の出来の良さなので)、おほかたの寄せ(多くの人気)、おぼえよりはじめ(評判の高さをはじめ)、なべてならぬ御ありさま容貌なるに(並々ならぬ御人格御器量なので)、宮も(春宮も)、若き御心地に(素直なお気持ちで)、いと心ことに思ひきこえたまへり(特にこの姫を気に入っていらっしゃいました)。

挑みたまへる御方々の人などは(行く行くは后位をと競い合っている他の東宮妃の部屋女房たちなどは)、この母君の(この正夫人ではない明石母君が)、かくてさぶらひたまふを(こうして妃のお世話を為さるのを)、疵に言ひなしなどすれど(格が落ちるように言い做したりしたが)、それに消たるべくもあらず(姫の御声望はそれに消されることはありません)。

いまめかしう(現在最高実力者の姫として最先端の衣服文化を身に纏い)、並びなきことをば(並ぶ者が無いことは)、さらにもいはず(言うまでもなく)、心にくくよしある御けはひを(行き届いた教養高い御言動で)、はかなきことにつけても(ちょっとしたことにも)、あらまほしうもてなしきこえたまへれば(感心するような応対を申しなさるので)、殿上人なども(政府高官たちにとっても)、めづらしき挑み所にて(楽しい文化教室になっていて)、とりどりにさぶらふ人びとも(それぞれに同伴する女も)、心をかけたる女房の(高官たちが世話をしているお手付き女房たちで)、用意ありさまさへ(衣装から身のこなしまで)、いみじくととのへなしたまへり(しっかりお仕込みなさっていらっしゃいました)。

上も(紫の上も)、さるべき折節には参りたまふ(事ある毎には参内なさいます)。御仲らひあらまほしううちとけゆくに(御二人の仲は良好に打ち解けて行くものの)、さりとしてさし過ぎもの馴れず(御方はあくまでも控え目で馴れ馴れしくはせず)、あなづらはしかるべきもてなし(無礼な田舎者と見下されるような態度は)、はた(また)、つゆなく(露ほども無く)、あやしくあらまほしき人のありさま(不思議なほど感心する人柄)、心ばへなり(心構えでした)。